



Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho) on aged, yellowed paper. The main text consists of large, bold characters, likely reading '源家' (Genke) and '双心' (Sōshin). On the left side, there is smaller, vertical text including the characters '下' (Shimo) and '遊' (Yū), along with a signature and date '辛酉年' (Shin'yu-nen).



孝命三行

下

荒野集卷之六

荒野集卷之六

雜

年中行夏内十二句

供屠糶白散

荷今

いさひなやとそあゑゆる人かき

春日祭

さしとるにまのあははは

若清水臨時祭

高き首もさつうかすすさる

灌佛

さよふれ日やいつてこぼし佛を

端午

れも聴くそ髪付は髪友(海)

施米

うちめくをこ次米そ虫臭さ

乞巧費

いの葉もや七夕草そまじき

駒迎

凡髪も縁のすこやいもこ

撰虫

まの枝もや口のちかこまか

十月更衣

あしをそ衣くこわくをりた

五篇

糸履に巻くひ指をねむる

追難

ねむる糸履に巻くひ指をねむる

詩題十六句

野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

水の中流るははるはるの風

白片落梅浮涸水

あるはるにけしは梅白く

春來無伴闲遊少

花膏よりあつたのあけ隣り

花下忘帰因羨景

手入なはるのけしは梅白く

留春春不留春歸人

寂寞

あつたのあけ隣り

巖風吹袂衣
不寒復不熱

錦脫を松の樹にひく

池晚蓮苔謝

蓮のよもひのきこゆる

暑月貧家何処有客

來唯贈北窓風

涼をよもひのきこゆる

大底四時心惣苦就中断腸是秋天

空の涼をよもひのきこゆる

夜來風雨後秋気飒然新

秋の涼をよもひのきこゆる

遅く鐘漏初夜長

耿々星河欲曙天

残照燈前猶斜光月空

残照燈前猶斜光月空

霜の舞や流るる白くはくしの村

万物秋霜能懐色

白くもやまぬ秋の心を秋の夜

十月江南天气好

可憐冬景似春景

こかしも志す息つくやも

寂寞深村夜残一雪中

神もさおもこぬあや雪の色

白頭夜礼佛名経

佛色の礼と懐懐く白髪

福翁の懐懐ひのうら

さすのうら

鋸鐮目立

舟泉

かき返しの夕日

村木突

五月園の鶯さけ人の家

鈎瓶縄打

かへるはやほのこゝろは秋の里

糊賣

あさもりのきわめおぼつて

馬米共搔

まがししの松をうきふりて

越人

茶主人

越人

魂在何許香煙引到焚處

かけ紙の抱はきくつらもか

揚貴妃

雲豎半偏新睡覺花

冠不整下堂

さる風をちゆるるを白く

昭陽人

小頭難履窄衣裳青黛

點眉之細長外人不見之應矣

女の姿もあやむのよのほ
なみん

西施

宮中拾得娥眉斧不獻吾

君是愛君

ふたのく極く牡丹の形

玉照君

玉貌風沙滕畫圖

くのまよもきつぬの柳水

一目留主をよめる結

卯

釣雪

なみの故や仏供焼火く
あま

辰

松毛をん繪書能来るはか

己

穉釋乃眠了了子扇出

午

みあひと藍丁を踏ん

未

蟬乃暮る武家終夕食色

申

五月雨や鶏と海をこぼ

あつあつと生をぬ

是れなり

凶歎

麻呂乃上り残るすあつれき

樹水

野鳥

鳴突けり新もき日あ

児竹

里虫

枝る虫よりは蜀漆か那

舎帖

海奥

松島 ころも縮川 せきと盆の月 今

川奥

秋の昏鴉川 くの火ぬき 合 咄

牛馬 罟 是謂天落馬首 穿午

鼻 是謂人

一方を 極 けく 桃 子 継 木 の 卯 越 人

藏 舟 於 壑 藏 凶 於 澤 謂 之

固 然 而 夜 半 有 々 力 者 負

之 而 走

かゝる 師 走 の 予 に する さい

絶 聖 棄 知 大 盗 乃 止

七 夕 と お う す こ も な さ ん し

鏡 者 大

あまの 鏡 けき けき の を せ 火 け

桂 夕

鈍者壽

鶏以乃雪ト一なるこみり抄 市山

二曜之序

ほろもろの鳴もむ時をききなり 一井

師直

うろろろ人のみろろろ 荊外 長野

一休

うろろろのかしらねーや月の雲 湍水

法然

うろろろ乃はくはらもあき 嵐彈

山岩

ねろろろろろろろ減るり山岩の角 湍水

海岩

苔ろろろろろろろろろろろろ 全

曠野集卷之七

名所

いすみのすみ直子に見る竜田

杜園

いすみのすみ直子に見る竜田

荷今

かゝり乃松もあつと

芭蕉

其来一把りつとあつと

湍水

嵯峨はくもあつとあつと

荷今

琵琶橋眺望

15

Faint handwritten notes in the right margin.

Faint handwritten characters.

Faint handwritten notes in the middle margin.

Faint handwritten characters.

Faint handwritten notes in the left margin.

るる残子懸獄さあや 隔ちるる 合吟

空あふるる 空もあふるる 宗祇 法師

義濃 團圓のふりあひのこゝろ

あふるるあふるるあふるる

子野あふるる 布子賣に更衣 杜因

麦うらやゆれもあふるる 志願の 重五

五月雨くかたぬぬのや 熊田橋 芭蕉

湖乃ふる 福なりやあふるる 五月雨 去来

牛はほるるあふるるあふるるあふるる 一髪

角田川うらや

いさのはゆ 磯波の 鮎合ひの 貞室

みよののこいふ 秋立貝の音 破笠

いささひも 満こさし ちあのかき 芭蕉

夕月や 杖くあなる 角田川 越人

九月十三夜

あふるるあふるるあふるるあふるる 素堂

野の寛きるる色を思ふ 胡及

野の寛きるる色を思ふ 測支

武蔵野やいづれも 舟泉

湖を渡る人村の流 尚白

かき寄るあはれ 伊豫 随支

あはれの日 洗惠

あはれと生海氣を撓や小の奥 俊似

あはれの寝轉極やとのたぐ 一矢

雪が富士を包み 湍水

くもる大雲は夕水 野水

星崎のやまにや 芭蕉

あはれ不破の小あはれ 如行

旅

雲雀と上とやいづれ 芭蕉

大和玉平尾村の

花の流傳は似る 全

橋頭里を眠るく過るなり
夕杣

日の入や舟をえく行棹の地
一葉

のさぐりや漆の屋敷をさきよ
荷兮

出川脱く後をねぬ衣を
芭蕉

あゝ人の儀別く

あゝまき吹あゝの松をく笑なり
除凡

寂しくぬく食物やゆをゆやき
冬松

蚊をころすくらに帯ゆる籠ぬ
昌碧

五月雨や桂月をおす市井家
松昔

夕立にもの大なる一志ほあり
傘下

芭蕉ちよと送る

稲妻あにきしきしきあふりり
釣雪

なまきしきしきすのほ秋の蟬
一井

あま風しきしきしきしき
野水

おひしきしきしきしきしき
舟泉

あま風しきしきしきしきしき
嵐弾

ちりしなみんじんむら

更級乃月ちこ人らるる續り 荷分

越人臨るるのしきりて

月にし服はつるを鳥乃う入 野水

たつたのたつたつとるは木曾の 芭蕉

知乃葉は是も教り秋のいか 路通

物形桶よりあ其角はるる

たつたつと

樽形桶に麻をまつたはの心 荷分

と満り 福はるるの 京 ちり

入月こら志はしきやうが 玄密

解をけを親めくお礎り那 一井

思川よる人らるる

澤菴乃墓をりつたの秋のそら 文麟

草枕ちりしきりあるのそら 芭蕉

旅あゆぬ口らるるや村らる 常秀

高野のそ

あまのたつたふり奥の院

松園

橋のくしあふりさるる食ふ

梅舌

高野のそ

又あの花さるる色

雛子の色

芭蕉

あやあさすおとくそのついでに

荷弓

ささふ入湯をさひひたり一盤

同

一切のなすひもある位ぬるぬ

杏雨

子

看衣をさるるゆきせもの文

秋風

何れや白髪ふかつく麻衣賣

亀洞

九月十日まふ色のさるる

かかれあやふりあさあの中におる

嵐雪

あやあさをさるるの地穂の好

曉語

人のいささをさるる

さるるあやあさあの中におる

芭蕉

四里の人さるる

いかに
松園

鐘倉建長寺

あつちの
越人

あつちの
あつちの

あつちの
荷今

あつちの

あつちの
嵐弾

あつちの
去來

あつちの
西武

あつちの
芭蕉

あつちの
除風

あつちの

あつちの
越人

あつちの
伊勢

あつちの
一首毒

まぬくや余のこころを晴らす

除風

蚊をかくるをわらわするあり

長虹

山に下り月をまじりて

文源

虫に小神をまじりて

冬文

さけめ妹の垣をまじり

心棘

六宮粉黛無顔色

半月周の稲妻の如き月の影

長虹

一歩の如く人を待たぬをまじり

尚白

さけめ

さけめとまじりて

荷兮

さけめとまじりて

小春

喜のまみあをまじりて

越人

松の申時をまじりて

俊似

物おとし火をまじりて

舟泉

うらわす火をまじりて

嵐長

山初めの如く

松芳

まぬ〜とを教又とてしつゆり 冬松

たそろ〜やまぬ〜の比御歌のよ 昌碧

無常

未期

あまの心をさすはゆ記松外か 守武

常世

笑つあまの心をさすはゆ記松外か 傘下

未期

あまの心をさすはゆ記松外か 元順塚

松坂のほねとらふ人のあまの

あまの心をさすはゆ記松外か

橋乃くはるを教又とてしつゆり 荷今

あまの心をさすはゆ記松外か

あまの心をさすはゆ記松外か 京 玄來

あまの心をさすはゆ記松外か

あまの心をさすはゆ記松外か 荷今

サトウとや〜妻の身ほり

水々月の相ナリのナリ一ナリもナリとナリとナリし

野水

辞世

主 あら流や灯籠一川又まこ母

あゝとや〜流り

似て顔のあゝとや〜一躍り

尾梧

一原野

を〜ちのや小所〜ちのり

釣雪

上妻の追言

を〜な〜志の里人ろ然のむ 自悦

妻下り妻乃こまのり

〜

新〜流すやか〜ひえゆ〜わら

玄來

こ母又ありし後

その人さる斬さ〜形〜秋の流

其角

あゝた〜流るる子然を

松風子や雲の合ふは雲の音 尚白

あゝ人の追慕

埋火をきゆやあまのこゝのきゝるを 芭蕉

旅してみまかりを旅人を

あゝ雪のふりやうらやうらあはれり 嵐弾

冬も野にやまの佛のあはれ 加賀 小春

曠野集卷之八

釋教

伊藤

神垣や松ありもみははばば 芭蕉

負く来るぬねは 嵐弾

西行上人五百歳忌

さけのさけのさけのさけの 荷兮

松河 遠忌

連翹やを移り目ゆく志は然り

胡及

くく首の竹の葉くは二玉小

松芳

木履をく傍のゆかり雨乃花

杜圃

けりしををうめく数くはたのみ

冬松

花の酒傍も仙人場さこの水

其角

貞享つらけ辰の歳は生目東照言の別當

僧正の山房に慈恵大師近座執事法華

八講の徳に(そま)をを徳引より

序品のさう成

散花のりらむしーるーか 越人

如居の徳やあらそくは山原中(た)く晴さ

あと龍女成佛の雨のあて志のひあを

島かむ色のーせん

ほろくそあるるをくわらひの玉 同

観音の尾とのさかろく候より 俊似

古寺やほるるあうの葦草 一井

八雲のあて

伊豫

海をみあぬるしひこむやのひ 千園

嘆よかりふるんあ寺の紅牡丹 一井

復心や本張くの江湖の屋 葦葉

ちあうりう

灌佛乃ゆよき神あふ麻のふか 芭蕉
灌佛のそ比法しちくかたし 尚白

ちあうりう

腰のあふよ礼をさうりみか山か 一雪
奇くまて菴一日の法ふ加賀一矢

十如是

ちあうりうあう神く通る 荷兮

目身即佛

復陰乃言あかちんの佛ト 愚益

ほろひや俛の絶たる夏夜 嵐彈

たぐらや 門かあう絶餓鬼棚 荷兮

おのそけち成とるひの氣さし 探丸

石籠く絶縁鬼の棚のくつふ不 文里

魂系舟く酒をも向やり 亀洞

たもあつと道ふあはれなる水 卜枝

松待みよーらんらん松乃陰 釣雪

平ホ施一切

松待みよーらんらん松乃陰 後似

稲妻くー大佛 松乃陰 荷兮

垣越くー引返寺 松乃陰 卜枝

あゝ人四時の景物なりこそ水鏡を

鶴とを不食不圖そらと感へ

あもるをさくさく

るくさぬら佛くならハぬら 荷兮

あもるの鳥のく

燕も清寺乃 熟くもくそ 其角

進くあく 松金松く 也月の舟 一井

神の子く亦綿をくさるは師 卜枝

人のあもるあもるあもる
くさくさくさくさく

夜悪くくみさあー けり一時雨 嵐弾

鎌倉のあ園論寺のく

たささの海や 直くくさく人 越人

古寺の雪

雪や伽藍の雪見也ひ

荷兮

同

雪やや二王より斤腕

俊似

つりあそこのいされも雪仏

一弄

於あする人のさハや融鼓

文洞

千觀り馬もかせり

其角

薬王品七句

如寒者得火

おの白くむの雪の

胡及

如裸者得衣

雪乃日やほ栲拾ふあま家

如商人得主

双六乃あひそふ

如子得母

竹もくをけそ死

如渡得船

月形比隣の板木さるやなり

如病得醫

かきこゝとさし流るる人けはふりあは

如晴得燈

秋のよやむしゆもさしなは

神祇

古まやるるるりる柳子頭

釣雪

二月亦五日を細六

花ささるや女四日の月形梅

荷雪

ちんちんと梅さぬるるるる

同

さるるるあひさるる神の梅

亀洞

上下のさるるる神の梅

昌碧

灯のあすのなると梅の中

釣雪

何れもわづらわぬをよめし梅の好 越人

是くもあはれをよめし津の梅 舟泉

月代も志しむるや梅の好 雨桐

向あそ梅をよめし松籬たみりり 重五

繪馬も侍人の好もさめし 玄察

花もよめし齒束かきよめし 鈍可

宮乃後川後もよめし 李桃

此も波の本もよめし 好葉

ほろもよめし神の好の中をよめし 玄察

まもよめし灯をよめし 亀洞

破扇もよめし 未学

川葉もよめし 荷今

こもよめし や里もよめし 尚白

此もよめし 松芳

あもよめし 称宣の好もよめし 落梧

春宮奉納

さきまのまこと妙也袖う糸 利重

跡の方也二疾をさすの神未か 野水

終藤川昔の縁から神未か 昌碧

かつさの神さきふさき庭火か 村俊

橋枕や片後さる煤さるひ 十枝

祝

肩付をいくよさなりぬをまへ 冬文

荷号り四十乃さきく

貴まを竹を修又んぬぬ 童五

君う代やさくくさあさ 五つを紀 越入

青苔々何ほさると流沖の石 傘下

いとさ満るぬおさ枝はらん 亀洞

子代のぬにちひさき 同

きさかか流ぬる人ふりさき

先福へ梅成んのあさ籠り 芭蕉 入

五子